

伏見康治先生のお導き

能澤正雄（元日本原子力研究所理事）

2003年の夏に東京會館で行われた伏見会で先生にお目にかかったのが最後になった。その年の秋に私は水戸市の家を引き払い大阪府の藤井寺市へ引っ越した。かねてから頸椎のところでの神経圧迫症があり、加齢による症状の進行で歩行が困難となり、43年間続けていた毎月の水戸と大阪の往復が重荷となってきたからである。

1948年4月阪大の物理の学生になって直ぐ、大塚益比古君と川口正昭君と親しく話すようになった。その夏に、川口君の誘いで私も大塚君と共に阪神電鉄の香櫞園から海岸の方へ行った所に往んで居られた伏見先生を訪問したのだった。その折りに、小学校1年生だった讓君が居間でお茶をよばれていた我々のところへ取ってきたよと泥鰌を差し出されたのを覚えている。

1950年、私が学部の3年生になって卒業研究のために入れてもらったのは菊池正士先生の研究室だった。だが間もなく、菊池先生はハンス・ベーテの招きでコーネル大学へ出掛けられた。1951年度予算で、大阪湾に投げ込まれてしまったサイクロotronの再建資金が認められた。阪大には電源一式など残されていたものが多かったからだと言われた。最年長の若槻助教授を中心に計画を進めることになったが、菊池先生が帰国されるまで伏見先生に代表をお願いすることになった。

その頃、伏見先生から昔出した「不思議の国のトムキンス」を持ってないかと聞かれ、家にあったのを差し上げると大変喜ばれた。何か、版権問題を解決して、改訳を出されるとのことだった。

1959年の秋に広島市で物理学会の分科会があった際、東工大の武田栄一教授が私を呼び止められ、阪大を辞めて原研へ来ないかと要請された。当時、武田先生は原研で原子炉開発部門の非常勤の研究室長をやっておられたが、そこは若い人ばかりなので研究経験のある人を入れたいと考えられたのだった。数人の採用枠がある、君が適任ではないかとの話を聞いたのでこの話をする次第だとのこと。広島から大阪へ帰ると今度は若槻哲雄教授から原研の核物理研究室への就職を薦められた。私は武田先生から勧説を受けていたので返事を保留していた。大阪で既に原研の理事長を引き受けられていた菊池正士先生に会う機会があり、挨拶したら原研に来るなら原子炉が本命だからそちらを選ぶようにと言われた。後に、原研の核物理研究室長をされていた百田光雄先生から能澤を誘ってみたらと武田先生に言われたのは、伏見先生だと教えられた。武田先生は戦前、阪大理学部におられたので伏見先生とも親しかったのである。1960年4月、私は東海村へ着任した。

1969年頃、原研で働いていた私の所へ伏見先生から連絡があり、頼み事があるということで、東京で出張の折にお会いすることにした。それは、共立出版社から刊行される予定の物理実験講座の原子炉・核融合編を引き受けたのだが、原子炉の部分を助けてくれないかと言うものだった。私に執筆者の人選を任せて下さるならやりましょうと答え、原研の実績のある人に各部門の執筆を依頼したのだった。私は序論として、実験に必要な基本的な原子炉物理を伏見先生との共同で書いた。核融合・プラズマ編は原稿がなかなか集まらないので、結局のところ原子炉編が独立で出ることになった。核融合についても伏見先生の指示で私がオークリッジ国立研究所でした仕事を寄稿した。当時は学園紛争の余波でこの講座の原稿がなかなか上がってこないと編集担当の佐藤さんがこぼしていた。

その後どういうお気持ちだったのか未だに判らないのだが、公明党の推薦で参議院議員になられた。議員会館にお訪ねしたり、神宮前の近くの議員宿舎にご一緒に泊めて頂いた。原子力船「むつ」の失敗の原因を明らかにしたいので、手伝うようにと言われていたが、結局のところお役に立てずじまいだった。

私が原子力開発の分野で多少の仕事が残せたのは伏見先生のお導きによるものである。

2008年8月6日記す